



SHIRANE

発行/社会福祉法人白根学園 発行責任者/三木 健太
住所/横浜市旭区白根7-10-6 TEL.045-951-2669 FAX.045-951-7773



Homepage



特集

TOPIC 01

夏祭り

TOPIC 02

歴史探訪

TOPIC 03

研修報告

目次

- ・ 学園長挨拶②
- ・ 行事〈夏祭り〉③
- ・ 事業所紹介④
- ・ 歴史探訪⑤
- ・ 研修報告⑥⑦
- ・ 職員エッセイ⑦
- ・ まちがい探し／編集後記⑧

障害のある人の地域生活を考える

2025年8月 学園長：飯山文子

私たちは生まれ育った家を出ていくときに「地域生活をする」とは言わない。何故障害のある人ばかりが「地域生活」と言われるのか。それは、障害のある方々が、長い間強いられてきた生活のスタイルを変えるところから来ている表現なのかもしれない。社会福祉職として、施設の職員として、入所施設であれ、GHであれ、在宅であれ、どこで暮らそうと、【知的障害のある人が日々の暮らしを営む】ことを支える、支援するとはどういうことか、ということをごるごる考える。

私自身は、どこで学び、どのように働き、誰とどこでどう暮らすか、それまでの経験や失敗から学び、当たり前だが自分で決めることを繰り返しながら現在に至っている。勿論回りに流されて考え無しだったなあ、ということも含めて意思決定を積み重ねて今がある。この先も選択と決定の連続だろう。私に限らず、ふつうはこのように、取り立てて意思決定とも意識せず、自分の経験に基づいて意思決定を繰り返しながら歩むのが人生であり、それが日々の暮らしを営むということだと思う。

翻って利用者の方々の人生に思いを馳せる。利用者の方々はどんな気持ちで施設やGHで日々暮らしているのだろう。彼らは今、本当にやりたいこと、やってみたい仕事ができているのだろうか。白根学園の利用者に限らず多くの障害のある方々は、その障害ゆえに、私たちが当たり前のように体験してきた、自分のことは自分で考えて決められるようになるプロセスを踏むということを、私たちと同じように保障されてきてはいない。多くの利用者は多分、白根のことが好きでいてくれるだろうけれど、それは「まあいいよ」だったり、GHや入所前に体験利用したとしても、「うん、悪くはないよ」「楽しいよ」というところではないだろうか。でも本当はどこで誰と暮らすことを望んでいるのか、どこでどんなことをしたいと考えたりしているのか、私たちは知りたい。更には言えば、色々な望みや考えが、広がっていくような働きかけをして、彼らの人生がもっともっと豊かになっていくように寄り添いたい、と思っている。勿論これまでも精一杯工夫を重ねてきた。しかし一法人、

一事業所だけでやっていくのには自ずと限界があるのではないか。

例えば、地域の様々な法人や事業所が自分たちの強みと弱みを共有して他所と繋がってみるのはどうだろうか。そのような顔の見える、法人や事業所を越えての連携体制が地域の中で実際に機能して、障害のある方々に門戸を開いていけば、彼らの経験を積める機会が増え、自分で考えて決められるようになるためのプロセスを保障していくことの一助にならないだろうか。

特に入所施設は限られた地域の資源の一つであるから、しっかりとその役割を果たしていかなければならない。障害特性等によって本人が激しく混乱している時期に、まずは丸ごと受け止め生活を共にしながらその方の全体像を多面的に見て本人に合う形で混乱を収められるよう、本人を取り巻く状況を理解しやすいように整理していく。勿論やがて元の居場所に戻り、そこで新たに色々な経験を積んでいく。その後も地域の仲間として密に連携していれば、しばらくしてまた混乱したり少し疲れてきてしまったとしても、また、入所の機能を使うなど、いくらでも支え方はある。

これは現行の入所の二次相談支援の発展形のようなイメージでもあるが、地域の様々な法人、事業所間でこのような柔軟な考え方による連携体制を採り入れられれば、障害のある方に対して更に多面的に色々な側面から働きかけができて、双方にとって新しい可能性の発見につながり、より豊かな生活が送れるようになるのではないだろうか。そして新しい「地域での生活を支える」仕組みや制度になっていくことにもつながると、暮らしやすい世の中になるなあと期待する。

地域で一つ二つ連携してみたところで、明日から世間が劇的に変わるわけではないが、そのような小さな取り組みの積み重ねが、障害のある人たちの地域での暮らしのあり方が根本から大きく変わることにつながると信じている。



● 白根学園 夏祭り2025 ～笑顔あふれる夏のひととき～

ホーム歩：中村 仁

2025年7月25日(金)、夏の陽射しがまぶしく降り注ぐ中、白根学園の園庭にて恒例の「夏祭り」が開催されました。今年も天候に恵まれ、夕方には、多くの利用者さんやご家族、地域の方々、そして子どもたちが会場に集まりました。開始前から年に一度のお楽しみを心待ちにしていた皆さんの笑顔があふれ、わくわくとした雰囲気に包まれていました。

屋台コーナーでは、焼きそば、フライドポテト、アイス、ジュース、やきとりといったお祭り定番のメニューが大人気。特に、セブンイレブンのブースでは、ポップコーンや揚げ物など開始直後から長蛇の列ができるほどの盛況ぶりでした。そして今年も「ポンパドール」のパンを販売し、おしゃれでおいしいと大人の参加者を中心に話題を集め、こちらも早々に完売となりました。また喜月堂の和菓子もひんやりとした美味しさで暑さをひと時でも忘れさせてくれました。

屋台以外にも、楽しみは盛りだくさん。迫力満点の太鼓の演舞は、会場の中心で行われ、力強い音が夜空に響き渡り、演奏が始まるとリズムに合わせて手拍子をする子どもたちや、真剣なまなざしで見入る方々の姿が印象的でした。また盆踊りでは音楽が流れ始めると利用者さんや盆踊りのボランティアさんたちが踊り始め、気が付くと太鼓を中心に大きな輪が広がっていました。

さらに、お面販売やくじ引きといった縁日コーナーでは、子どもたちが目を輝かせながら参加していました。景品を手に喜ぶ姿、やきとりの香ばしい香り、盆踊りの音楽はまさに夏を感じさせるひとときでした。

今回の夏祭りには、子ども連れのご家族の姿が多く見られ、「地域の方々と一緒に楽しめるのが嬉しい」「毎年この日を楽しみにしている」といった声も多数いただきました。日頃なかなか交流の機会が少ない中、このような行事を通じて地域とつながり、笑顔を分かち合えることの大切さを改めて感じる一日となりました。

最後に、ご協力いただいたすべてのボランティアの皆様、協力企業の皆様、そしてご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。来年もまた、みなさまにとって楽しく、思い出に残る夏祭りを開催できるよう、職員一同努めてまいります。



光の丘

光の丘：早坂 健快

光の丘は主に「施設入所支援」「生活介護事業(日中活動支援)」「共同生活援助(グループホーム)」「短期入所事業」「二次相談事業」の5つの事業で利用者さんへの支援を行なっています。その中で今回は光の丘の「生活介護事業」について紹介したいと思います。

「生活介護」とは、“主として昼間において、入浴、排せつ及び食事等の介護、調理、洗濯及び掃除等の家事並びに生活等に関する相談及び助言その他の必要な日常生活上の支援、創作的活動又は生産活動の機会の提供その他の身体機能又は生活能力の向上のために必要な支援を行います。”と厚生労働省の「障害福祉サービスの概要」に記載されています。

具体的には指先や身体を動かす機能訓練や軽運動、貼り絵や工作などの作品制作、空き缶潰しなどのリサイクル作業等が挙げられます。

では、光の丘で提供している活動の中から3つ紹介いたします。

1つめは自主製品の製作です。利用者さんがクロスステッチ、スウェーデン刺繍などで施した布を布巾やポーチ、コースター等にして販売しています。絵柄や色選びは利用者さんがご自身のアイディアや職員のアドバイスなどから決めており、野菜や動物、花など1つ1つ丁寧に糸で絵を仕上げています。

こちらの製品は光の丘に併設されている「Café ルーチェ」で展示、販売をしています。また、7月開催の「夏祭り」、12月開催の「感謝祭」でも販売しておりますので、お近くに来られた際にはぜひお手にとって、手作りの風合いをお楽しみください。



2つめは機能訓練、軽運動です。光の丘では日中作業の前に、必ずラジオ体操を行っています。慣れている方は体を大きく使って、あまり体操が得意ではない方は職員と一緒に、1日の始まりに身体をしっかりと動かす機会を設けています。

機能訓練では、階段や踏み台を使った昇降運動、エアロバイク、散歩等を行っています。また最近は「スヌーズレン」という光や音、アロマテラピー等を通した感覚刺激やリラックスを促す活動も取り入れています。

3つめに紹介するのは「余暇活動」です。光の丘では週に1回、「ドリンクタイム」という、利用者さんが好きな飲み物を買って、それを飲みながらのんびりしていただく時間を設けています。自己決定の場として大切にしている時間のひとつですが、利用者さんにとっては朝から「今日ドリンクタイムあるよね」と話題になるほど楽しみにされているイベントの一つです。

また定期的に茶道クラブを開催し、利用者さん自らお茶を点ててお茶会を楽しんだり、外部の音楽療法士の方をお招きしての音楽療法を実施したりと、作業だけにとどまらず楽しい活動を多数実施しています。

その他にも貼り絵や工作等の作品制作、洗濯作業、お疲れの時にはリラックスなど、ご利用者さんの得意な事や気分に合わせて活動を提供しています。利用者さんの持つ目標や課題を汲み取りながら、一人ひとりに合った支援をこれからも提供していきます。

歴史探訪 ep.3

希望とサクラの歩み

工房金魚：伊藤 司

2008年(平成20年)鶴見区矢向に開設した障害者支援施設希望(以下:希望)。今回は設立から17年目を迎えた希望について掘り下げていきたいと思います。

JR尻手駅から歩いて10分。横浜の中でも川崎駅、横浜駅へのアクセスも良い場所に位置しています。その門を抜けると芝生の中庭を囲む形で建物が配置され、利用者さんがゆったり休憩のできるベンチが用意されています。敷地内に並ぶ作業棟では、利用者さんの賑やかな声が聞こえてきます。園庭から繋がる散歩コースには歩道に沿って桜の木々が立ち並び、春になると足を止め写真を撮られる事の多いフォトスポットにもなっています。

今でこそ環境の整っている希望ですが、開設当初はまさに手探り状態でした。

オープニングスタッフの大半は当時学校を卒業したばかりの新卒職員。社会人としての経験が浅い職員が多いため、各ユニットには他事業所で経験を積んだ職員が配置されました。開設前の準備段階で「エアコンのボタンはこの場所が作動するか」等のハード面の確認、業務で必要な物の購入と設置の話し合いを繰り返したといいます。同時に利用者さんが入所されるまでの間、多くの研修を行うことで知識をより深めていきました。また、混乱をしないように入所の受け入れは少しずつ時間を空けながら慎重に行いました。

順次受け入れていた入所のユニットが定員に達し、翌年には初めての創立記念会食を行いました。現在では大きな会場のあるお店で食事を楽しんでいますが、初回の希望の記念会食はケータリングサービスを利用し、中庭にテーブルをセッティングするというアットホームな形で行いました。

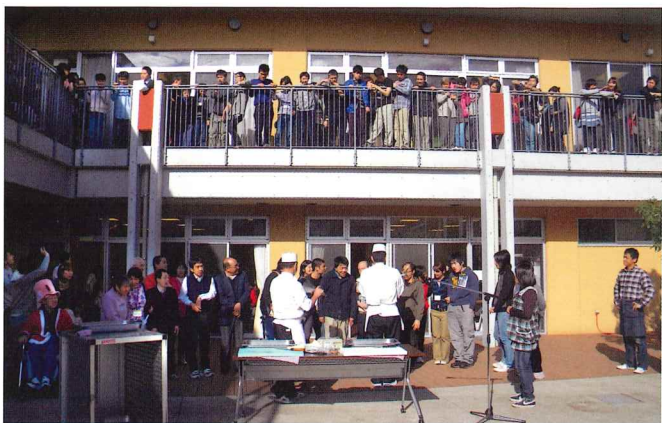
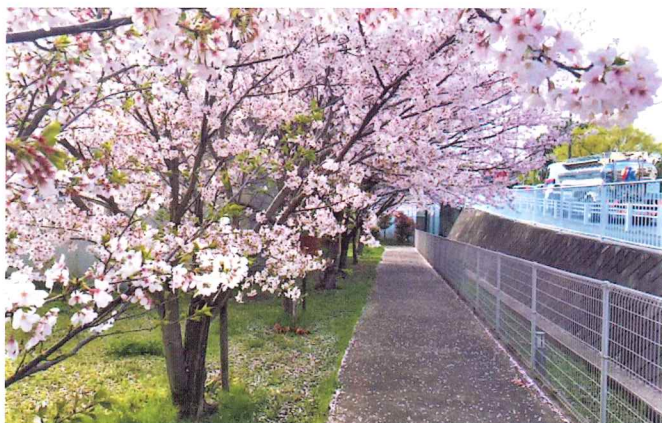
2010年には利用者さんが主体となった「利用者給食会議」を行い、当時の職員のアイディアと利用者の思いが一体化したものが形となった結果、お楽しみメニューとして

現在でも利用者さんの笑顔が溢れる行事として残る「給食カフェ」が誕生しました。

今回希望の歴史を振り返ってみて、当時を知っている職員から詳しく話を聞く事で、今の希望の土台となっているその頃の背景を私も詳しく知る事が出来ました。

前述した希望の散歩コースの桜並木は当時とても小さく、春になっても桜が咲く事なく葉が増えるだけだった様で、「桜の木ではないのでは」という声もあがったようです。

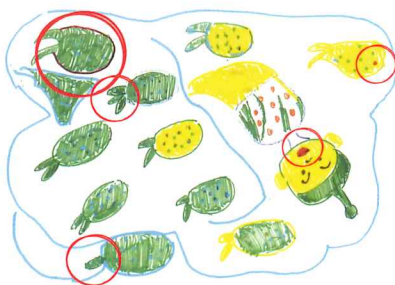
希望の成長と共に今では春を彩る立派な桜に成長した桜の木々は、今後も希望の更なる発展を見守り続けてくれるのではないのでしょうか。



8P

まちがい探し の答え

※逆さになっています。



研修報告

内部研修「しらねの里 意思決定支援についての事例研修」 しらねの里：白木 孔明

しらねの里では利用者S.Yさんの事例を基に、意思決定支援の研修を行いました。意思決定支援とは、「困難を抱える障がい者が自ら意思決定をできるように、必要な支援を可能な限り尽くす事」です。

研修では、支援する側の視点ではなく「本人」の視点に立つことが重要であり、その手がかりとして利用者さんに関わりのある方々、職員、ご家族へ意思の形成などに繋がる過去の情報について細かなヒアリングを行いました。

ヒアリングの結果「好きなものを強化することで可能性が広がるのではないか」と考え、大好きなシュレッダー作業の動きをコーヒー豆を挽く動作に変えて、しらねの里のカフェで皆さんにコーヒーを振る舞いました。皆さんが喜んでいる姿を見て、更なる可能性が広がったと感じました。

人生は意思決定の連続で、誰もが何かを選んだり、迷ったりを繰り返しながら様々なことを経験し、生活しているという事や、私たちが普段行っている何気ない行動や、経験の積み重ねも意思決定において重要な材料であることがわかりました。

内部研修「ぶどうの実 愛着研修」 ぶどうの実：後藤 みゆき

ぶどうの実では、2023年度より外部講師として、鹿児島女子短期大学准教授の平本譲（ゆずる）先生に継続的に関わっていただき、職員研修、職員育成を実施しています。目的は、複雑な経過を経て入所している支援困難児童への支援についてのスキルアップ、児童の権利をどう守るか。家庭に代わる代替機能としての施設の子どもの養育について、児童施設のありかた、姿勢を考え、学ぶ機会としています。今回は、直近の6月23日に実施したぶどうの実職員研修会の報告をします。

今回の研修では青葉学園の動画を視聴しました。重度障がいの利用者さん一人ひとりに個別対応を行い利用者さんの目を見て、声掛けではなく相手の気持ちになって問いかけをすることでその人の意思や意見を理解出来ていたことや、個別支援会議では利用者さんの声を拾い、利用者さんを中心とした支援が出来ていました。また、記録の書き方も「わくわく」や「ドキドキ」といった擬態語を使用することで当時の感情や思い、表情が見える記録となっていました。動画視聴後はディスカッションを行い「利用者さんの声を聴いているつもりでも、拾えていない声があるのではないか」「記録を残す事を第一と考え、利用者さんの感情や思いが見えない記録になっていないか」といった声が上がリ、日々の支援を見直す機会となりました。

今回の研修を通し、改めて利用者さんの声にしっかりと耳を傾け、楽しく安心して生活できるぶどうの実でありたいと思いました。

内部研修「日本知的障害者福祉協会 さぽーと倶楽部研修について」 法人本部：小林 慎太郎

当研修は、日本知的障害者福祉協会会員互助会さぽーと倶楽部が行う「研究・研修推進事業」による研修であり、講師として社会福祉法人青い鳥小児療育相談センター、医学博士の原仁（ひとし）氏をお迎えしての実施となりました。「知的障害の概念及び発生病態の理解」を研修テーマとしております。知的障害の概念や発生病態と、その特徴や経過を理解するとともに、実際の現場での支援にあたって、医療の視点から特に注意が必要な事柄や健康問題など日頃からの対応の仕方について考えます。支援にとって、この「医療の視点から」というのが今回の研修での要点であったかと思えます。



知的障害とは「知的機能が有意に低い」「社会生活上の適応に困難がある」「それらの状態が発達期に発生したもの」という「精神遅滞」の定義を踏襲する特徴があります。知的障害の方の特徴として、パニックや社会不適応を起こしやすいというものがあげられますが、環境への著しい不適応を意味する行動障害に対しての専門的

な対応が求められます。「医療の視点から」の行動障害への対処としては、行動変容法を基本とし、薬物療法の併用に躊躇しないといったものもあります。原因や診断名に対する治療ではなく症状に対する治療であることが考え方としてあり、対症療法が重要であること、そこに至るプロセスとして、共同意思決定の尊重が求められたりします。抗精神病薬には副作用（眠気、頭重感、思考鈍麻、脱力感）もありますが、量や体質にあったもので調整をします。

支援の現場では、こういった医療の考えと社会的な構造や環境を合わせることで共生社会の実現を目指します。障害というものをどう捉え、どう対処していくかが支援には求められてきます。学びにより質を高め、相互連携をしていくことがより良い共生社会の実現に近付くと考えます。

外部研修「自閉スペクトラム症支援者入門研修」 社会就労センターしらね：大畑 智寛

2025年5月28日から30日までの3日間、国立障害者リハビリテーションセンターで行われた自閉スペクトラム症支援者入門研修に参加しました。

本研修は自閉スペクトラム症の方に関わる支援者を対象としており、福祉従事者だけではなく看護師や作業療法士、言語聴覚士等の他分野の方が全国から参加しました。普段は関わる機会が少ない他分野の方々と支援の課題やチームアプローチの困難さ等を共有、検討できる良い機会になりました。

今回、自閉スペクトラム症の「特性」と得意不得意の「偏り」に注目して、一人ひとりに適した支援計画の重要性について学びました。また講義の中で「耳から取り入れた情報がすぐに頭の中で画像に切り替わり、そこから様々なことを考える」という当事者の話があり、抽象的な言葉はイメージが難しく、理解に時間を要する当事者の感覚を理解しました。

この研修を通して「自閉スペクトラム症の方に対して有効な視覚的なアプローチ」について詳しく知ること、実際の支援に繋げることが出来ると学びました。

今ある知識をさらに深めることや、支援を通して関わる他分野の方の考え方や価値観を知ること、支援の幅が広がることに気付きました。研修で学んだことを自分なりにまとめ上げ、他職員への共有しながら実際の支援に活かしていきたいと思います。

職員エッセイ

「手の中で生まれるリアルな世界：食品サンプル」 風の丘：遠藤 綾子

皆さんの趣味は何ですか。スポーツ、キャンプ、ドライブ、DIY、映画鑑賞、読書など、人それぞれですね。インドア派の私は、手芸やお菓子作りを家の中でひっそりと楽しんでいます。そんな私ですが、ぜひ皆さんにご紹介したいとっておきの趣味があります。それが食品サンプル作りです。

洋食屋さんや喫茶店の店先に今もメニューとして並ぶ、あのリアルな食品サンプル。その精巧さは何とも言えず心を奪われてしまいます。日本随一の道具街である合羽橋商店街には、食品サンプル作りの体験ができるお店があります。私はそこに何度も足を運んでいます。

昔ながらの蝋(ろう)を使った技法で私はこれまで様々な作品を作ってきました。熱した蝋をぬるま湯の中に落とし、瞬時に形を整えていく作業は、まるで魔法のようです。これまで作ったのは、「天井」や「たこ焼き」、「焼き芋」、「たい焼き」などといった作品たち。はじめて作った天井は、あまりに本物そっくりで、思わず箸を伸ばそうとしてしまうほど。そのリアルな質感を眺めていると、どれも本物と見間違えるほどの出来栄で、思わず笑みがこぼれてしまいます。

食品サンプル作りに加えて、私にとってのお楽しみは体験の前後で浅草を散策することです。美味しいランチをいただいたり、観光を楽しんだりするのもお決まりのコースになっています。作ったサンプルは部屋に飾り、その完成度を眺めています。

このサンプル作りの楽しさを、もっと多くの方にも知って頂けたらと思います。今後も興味のある方と一緒に製作体験に行き、この楽しさを分かち合いたいと思っています。皆さんも心がウキウキするような趣味を見つけて、ぜひ満喫してくださいね。



まちがい探し

この上下の絵の違いがわかるかな？

白根学園の利用者さんが作った

まちがい探しです。

5つまちがいがあるよ。

よく見ないとわからないから

頑張って見つけてみよう。

答えは5ページにあるよ。

作：地域センター和
田中 智子さん



編集後記

地域生活センター和：西村 友河

残暑ひときわ身にこたえる今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年は各地で早い時期から「猛暑日」が多く観測されています。ちなみに、気象庁では最高気温が25℃以上の日を「夏日」、30℃以上の日を「真夏日」、35℃以上の日を「猛暑日」と呼びます。暑い日はまだしばらく続きそうなので、外出時は日傘や帽子でしっかりと暑さ対策をしたり、水分補給をしながら、体調には十分気をつけてお過ごしください。

今回の広報しらねでは、そんな暑さの中でも元気に過ごされている白根学園の利用者さんの様子をお届けしています。私自身、日々のかかわりの中で、利用者さんの笑顔や何気ない会話に元気をいただくことが沢山あります。皆様にもその和やかな雰囲気が少しでも伝わり、明るい気持ちになっていただけたら嬉しいです。

